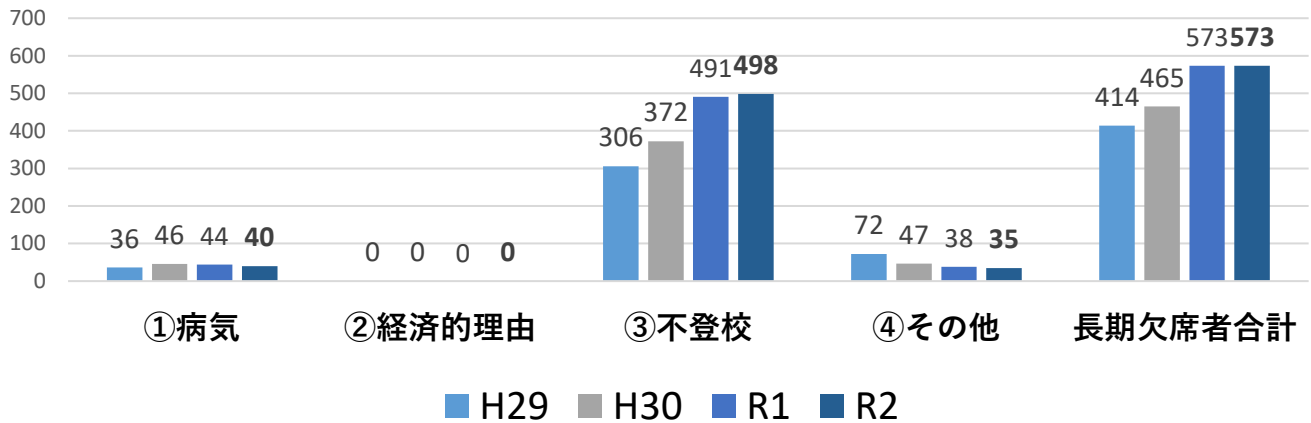


## 小・中学校の不登校の状況について (島根県「不登校及び不登校傾向の児童生徒に関する調査」より)

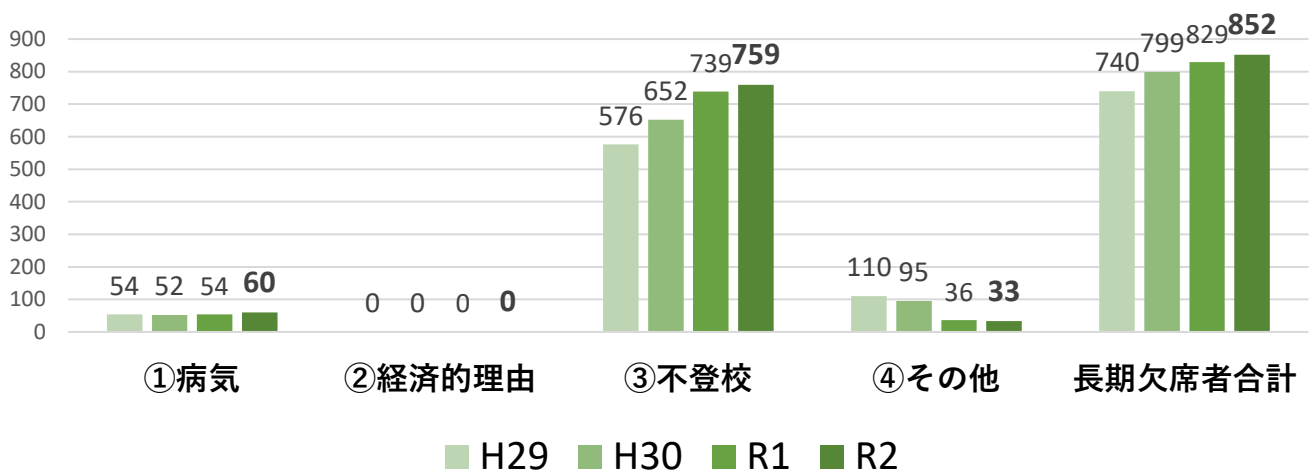
## 1 不登校児童生徒数の状況

## 不登校児童生徒数の推移

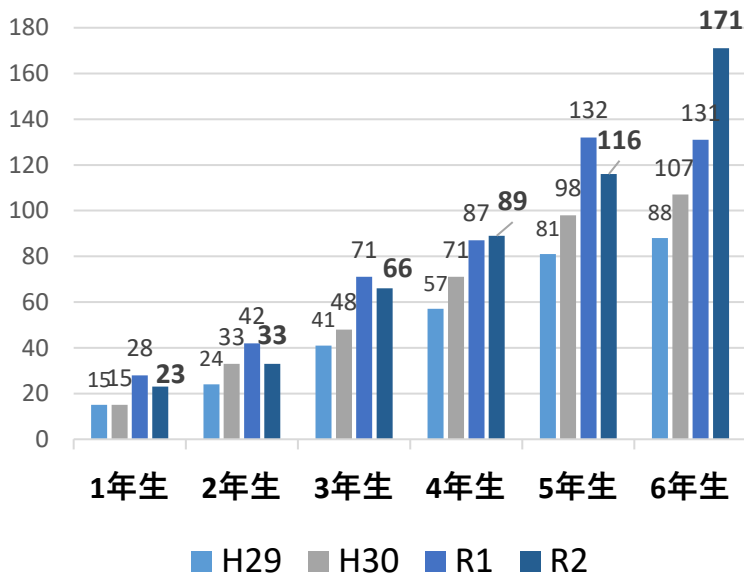
理由別長期欠席者 (Ⅲ期)



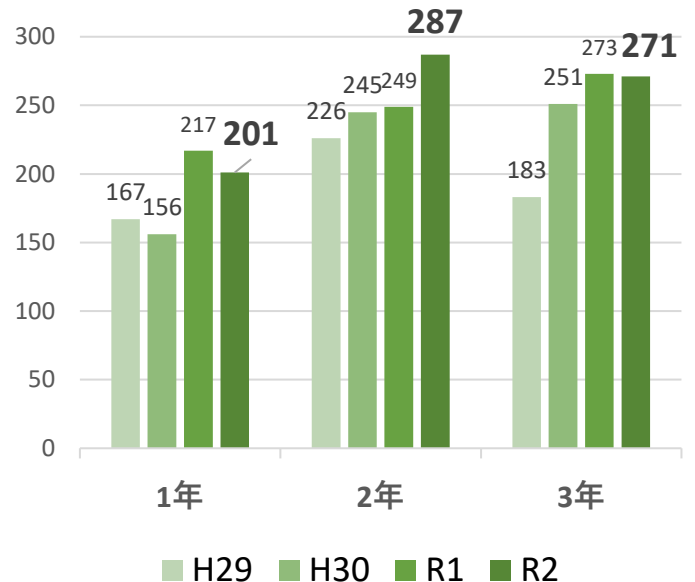
理由別長期欠席者 (Ⅲ期)



学年別不登校児童数の推移 (Ⅲ期)



学年別不登校生徒数の推移 (Ⅲ期)



○ 不登校児童生徒数

【小・中学校】

- ・ 長期欠席者数のうち、ほとんどが不登校による欠席者である。
- ・ 直近の3年間、増加傾向にある。R元年度からR2年度は微増であるが、高止まりの状態である。

【小学校】

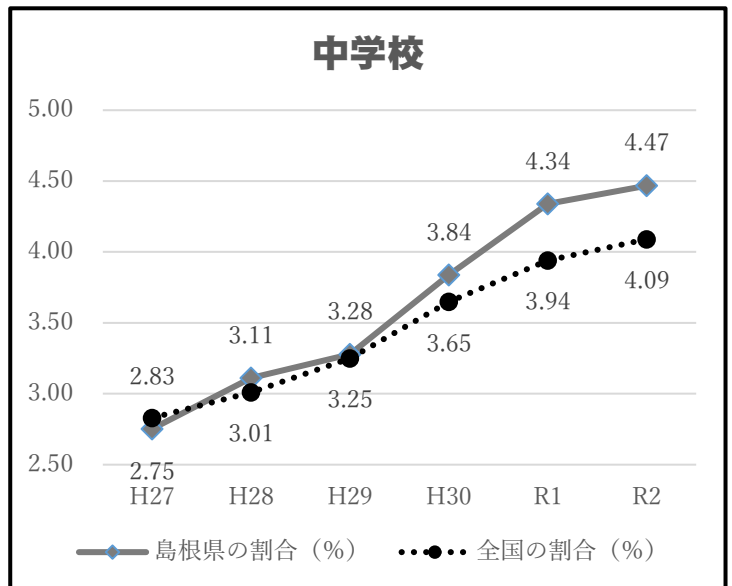
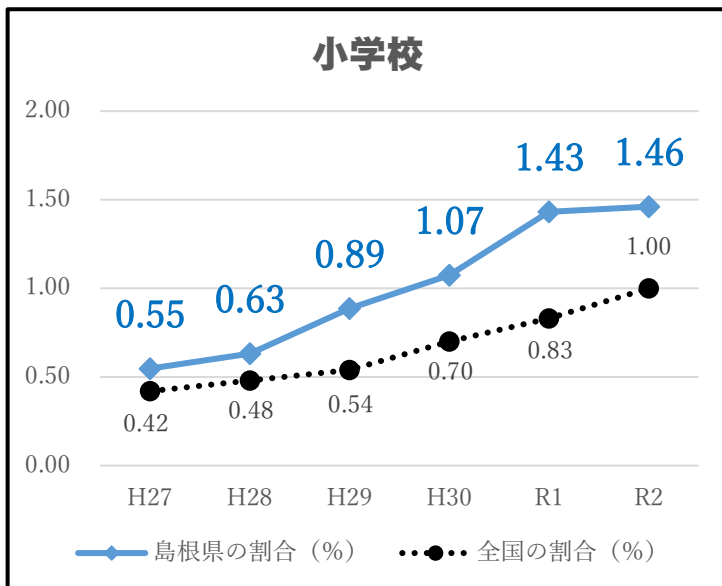
- ・ 学年別に見ると、学年が上がるにつれて、不登校児童数が多くなっている。
- ・ H30年度からR元年度にかけては、特に3年生、5年生で、R元年度からR2年度にかけては、6年生で増加が著しい。

【中学校】

- ・ 学年による差や増加率の傾向は、小学校ほど顕著ではないが、直近の3年間では高止まりの状態である。

**不登校児童生徒数の推移**

○ 全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合



【小・中学校】

- ・ 小中学校合計の全児童生徒数に対する不登校児童生徒数の割合は、令和2年度は2.46%を占め、昨年度同様、高い割合である。

【小学校】

- ・ 全国の割合も増加傾向にあるが、H29以降、特に全国と比較して増加率が高い。
- ・ 直近の6年間、常に島根県は全国よりも高い割合で推移している。

【中学校】

- ・ H27年度は全国より低いですが、その後は全国の割合を上回り、特にH29年度以降増加率が高く、R元年度に比べ、R2年度も増加率が更に高くなってきている。
- ・ 全校生徒数に対する割合は、小学校よりかなり高い。

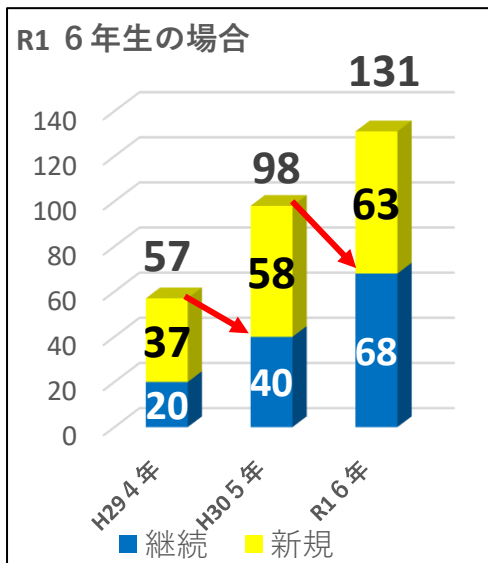
**2 継続・新規不登校児童生徒の状況**

① 継続数・新規数の考え方

- ・ 前年度も不登校であった児童生徒数（継続数）と、前年度は不登校でなかった児童生徒数（新規数）に着目した考え方。
- ・ 継続数と新規数を区別して見ると、不登校児童生徒数の総数とは異なる状況が見えてくる。

## 継続数・新規数の状況（小学校）

### ② 継続数・新規数の状況



◆令和元年度の6年生の例を見ると、H29年度（4年生時）に不登校であった57名のうち、H30年度（5年生時）に継続して不登校の児童は40名となり、17名は不登校の状態が解消している。

◆H30年度からR元年度も同様に、継続数は減少し、30名が解消している。

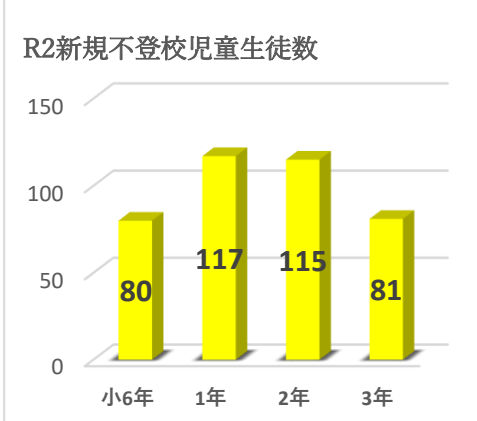
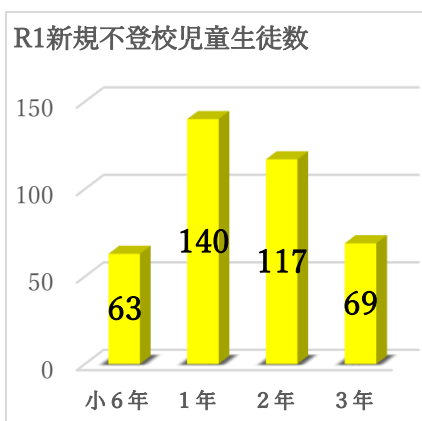
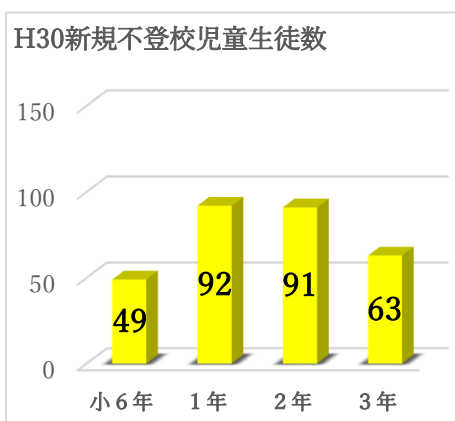
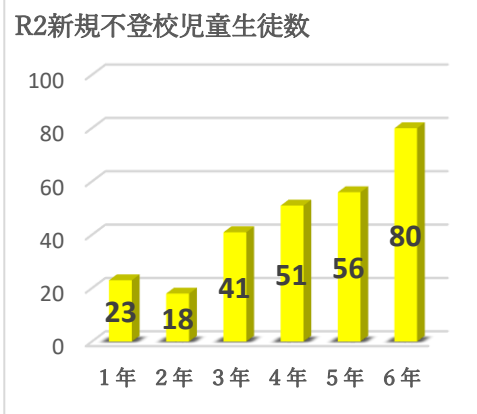
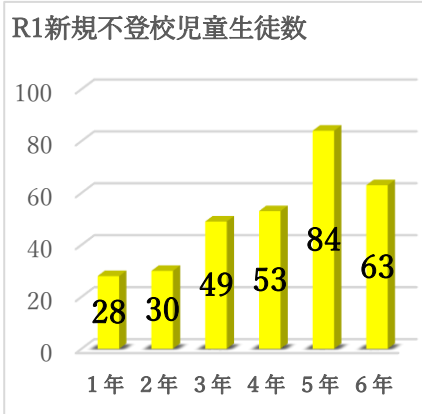
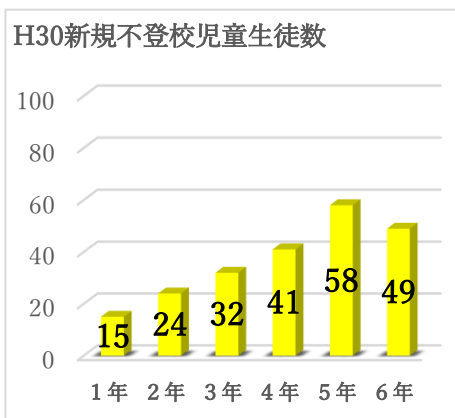
◆3年間の継続数の推移に着目すると、小学校・中学校ともに、全学年で同様の傾向が見られ、継続数は減少している。つまり、前年度不登校であった児童生徒のうち、一定数は毎年不登校の状態が解消し、登校するようになっている。

→ 不登校対応による一定の成果。各校のきめ細かな取組、対応事業等による成果。

◆ただ、減少した継続数に新規数が積み上がることで、総数としては増加している。

## 新規数の状況（小・中学校）

### ① 新規数の状況



- ・ 学年別の新規数に着目すると、小学校では学年が上がるにつれて増加する傾向にある。R2年度は6年生で新規数が増加した。中学校では3年生で減少する傾向がある。
  - 中学校3年生は、学校において自己有用感を味わえる機会が増える。卒業、進学に向けての見通しが持てるからではないか。
- ・ 中学校では新規数のピークは1年生で、その後、学年が上がるにつれて減少している。
  - 1年生は新しい環境、集団への適応、学習内容や学習形態の変化への適応に難しさがあるからではないか。